隊員たちそれぞれの思い

救急救命士として 地元に恩返しを

近藤（こんどう） あすか

中学生の時に女性救急救命士の活躍を紹介するテレビ番組を見て私もなりたいと強く感じ、今の職に就きました。

現場では女性だからといって特別扱いはされません。同じように期待をかけられることをうれしく思います。筋力や体力では男性に及ばない点もありますが、女性や子どもの患者さんに話しやすい気遣いができるように日々任務に当たっています。

地元の方からの励ましや、消防署見学での女子小学生の「お姉さんのように救急車に乗り、人を助ける人になりたい」などの言葉が、くじけそうになる自分に勇気を与えてくれます。感謝の気持ちを持ち、救命士活動で地元に恩返しをしていくことが私の使命です。

訓練に終わりはない

中村（なかむら） 亮平（りょうへい）

潜水士になったのは、先輩の勧めと自分でも興味があったから。

訓練は、市内のプールや川、海で行います。潜水士の活動は、バディと呼ばれる「相棒」と行動を共にします。

訓練の中に「バディブリージング」というメニューがありますが、これは緊急時を想定し、水中で一つの空気ボンベを使用し、バディと交互に呼吸を行うものです。相棒との意思の伝達が合わないとうまくいきません。

消防学校時代に教わった「訓練に終わりはない」という言葉。毎日の訓練は、どれだけやっても完璧ということはなく、継続していくことに意味があると思っています。いかなる場面でも最高の行動ができるように日々、努力を重ねていきます。

地に足着けて 日々の積み重ねを大切に

上川畑（かみかわばた） 勝文（かつふみ）

人の役に立ちたい、地元に貢献したい。そんな思いから消防隊員の道を選びました。活動する上で大切にしている言葉は「地に足着けて」かつて所属した川内高校男子バスケットボール部のチームスローガン。日々の鍛錬など当たり前の事を積み重ね、当たり前にできることが活動する上で最も大切だと考えています。

我々レスキュー隊員は、火災・災害・事故の現場において最初に突入する部隊です。それだけに厳しい現状を見ることもありますが、要救助者を無事に救助できたときの喜びは大きいです。

2年前、宮城県仙台市であった救助技術全国大会の開会式で、地元の中学生たちから東日本大震災での救援活動を行った事への感謝の言葉がありました。大変な思いをしたはずの彼らが、私たちを気遣う言葉を掛けてくれたことに涙が止まりませんでした。今後も先輩方の指導を仰ぎ、後輩たちに日々の訓練に励んでいきます。

通信指令は 先入観を持たず冷静に

上村（かみむら） 幸司（こうじ）

緊急通報の際には、相手からの言葉をうのみにせず、冷静に言葉を引き出す接し方が必要です。専門的には「オープン・クエスチョン」といって、通報者が自由に考えて答えられるよう質問を投げ掛ける手法。通報者の顔は電話越しに見ることはできなくても、周囲の音や声をもとに、救急隊が駆け付けるまでにできる最善の処置を考えます。

連携がうまくかみ合い、救助が成功したとき通報者から感謝の言葉が届く。それが最もうれしい瞬間です。

通信指令員として、これからも多くの方を救うべく現場に向かう消防隊員にベストな活動ができる情報提供を行えるよう、助けを求める窓口としてこれからも技術の向上に努めていきます。

消防の現状と課題

消防局長 新盛（しんもり） 和久（かずひさ）

現状

救急件数は年々増加しています。昨年は、過去2番目に多い4330件で、そのうち57％は、「急病」に分類されるものでした。

また、高齢者の搬送が全体の66％で、今後も高齢化が進み、救急件数・高齢者搬送件数は増加すると予想されます。

一方、昨年の火災件数は、35件と市町村合併以降では最も少なく、今年も少ない状況です。

火災が数件連続すると、防災行政無線や消防車で広報しますが、市民の方が「火災予防」の気持ちを持つことで、火災の発生件数は減少します。防火管理協会や危険物安全協会、防火クラブ委員会の啓発活動も火災予防に大きく寄与しています。

課題と対策

人口減少が進む中で、消防団員を含む消防体制の確保が挙げられます。

消防団は「地域密着性」・「動員力」が大きな武器ですが、団員が確保できないことは、地域防災力の低下につながります。

昨今、全国各地で豪雨、台風、地震など自然災害が多発していますので、消防団員の確保は喫緊の課題です。

この課題解決のため、大規模災害時のみ、大災害時消防団員、予防活動消防団員など、ある特定の任務を遂行する「機能別消防団員」の創設を進めています。多くの若者に崇高な消防団活動を知ってもらい、一人でも多くの方に参加していただくことで、「ふるさと薩摩川内市」の防災力は高まり、市民の「安全・安心」に直結すると考えています。

消防団という組織

前述にもあるとおり、現場で活躍するのは、なにも消防士だけではない。各地域に組織されている消防団員がそれだ。

彼らは、普段はそれぞれの仕事を持ちながら、火災や災害が発生した際には、活動服に身を包み、出場する。

市内には、中央・西部・東部・上甑・下甑の5つの大隊があり、その下に9つの方面隊と32の分団がある。また、団本部女性分団を含めると合計33の分団が存在している。

消防団の活動は、火事現場だけでなく、行方不明者の捜索やパトロール、火災予防の広報活動など多岐にわたり、誰よりもその地域に精通し、地域の見守り役としても非常に重要な任を負っているのだ。

必要なのはみんなで守るという意識

私たちは、消防局や消防団により、守られていることを忘れてはならない。

だが、同時に「自分の身は自分で守る」という意識も忘れてはならない。

災害発生時に必要なことは、「自助」「共助」「公助」の3つだと言われている。

「自助」とは、自分の命は自分で守るということ。

「共助」とは、自分たちの地域は自分たちで守るということ。

「公助」とは、国・県・市町村などの行政が主体となって、災害に強いまちをつくるということだ。

一番大事なことは、まずは自分の身を守ること。

そして自分の安全を確保した人たちの助け合いが大きな力になる。

災害からの被害を最小限に抑えるためには、災害が起きる前の普段から「自助」「共助」「公助」の考えの下、みんなで防災活動に取り組むことが何より大切だ。

その時のために、普段から備えておくこと、避難行動を確認しておくこと、そして、自主防災組織や消防団などの防災活動に積極的にみんなで参加をすることを心掛けていたい。

地域を守りたい、愛する家族を守りたい。

立場は違っても思いは同じ。私たちは、共に手と手を取り合って、このまちを守るためにできることをこれからも一緒に考えていきたい。